

『観』とは

～品格ある地域として、「地域の記憶」を今に伝え育みたい

株式会社 プランニングネットワーク
まちづくりマネジメントプロデューサー
(立教大学観光学部 兼任講師)

大 下 茂



◇はじめに

濫読こそが私の思考の源であった。読書離れ派と是对称的な活字依存、いや活字信頼派であったのだろう。私を知る人は、声をそろえてこう言う。「いつも背負っているリュックはなんでそんなに重いのか?」と。それは、絶えず3冊の本が入っているから。歴史に関わる本、趣味の鉄道のオタク本、そして研究対象としている観光や地域振興に関する本である。通勤途中、昼食後に微睡む直前、そして何よりも思考の壁に直面したとき～時と場合をわきまえずリュックから本を取り出して開く。そして活字から何らかのヒントを得て自分で大きく領き納得して、その先の思考をつづける。私が思考を広げるにあたって、活字からのメッセージに依るところは依然として大きい。しかしここ2～3年は少しずつ変わってきている自分がわかってきた。その話を本稿でお話したい。

1. 佐原のまちとの出会い

千葉県北西部に、かつては利根川舟運によって活況をみた佐原という都市(千葉県香取市)がある。江戸中期以降に栄えた河岸のある商都であり、当時は江戸にも優る文化が繁栄した地である。まちなかを流れる小野川沿いには、往時の町並みが現在も残っている。

ここ2～3年、月に2度は呼ばれて足を運んでいる。隣町から駆けつける「まちづくりの町医者」のような役割と自らは認識しているが、佐原側の要請の本意は怖くて確認できずにいる。通常は会議室に籠もり、数ある懸案の一つずつ頭を悩ませているのだが、時として町の中の散策に出向くときがある。ある時のこと、まさに黄昏時という語源にぴったり

の風景を小野川に架かる忠敬橋の上で感じていた。その時、目の当たりに広がる風景の中に、地域の歴史が継承されつづけてきた暮らしを介して、明確で強烈な地域の記憶というメッセージを受け取ったのである。風景が闇に包まれようとする瞬間であったことを今も覚えている。都市の中での躍動・喧騒が落ち着きを見せる瞬間に、地域としての長い歴史とともに地域で大切に育まれてきた記憶が伝わってきたのである。

佐原に関わる本は、当然のように目を通していた。その時代に自らの思いを馳せ、自らが描く心象風景を創造していた。しかし黄昏時の風景は、活字の先に見えていた風景を超えたものであった。人々の地域に対して慮った深い思いが重なりをみせる時、地域の記憶が風景として現れてくることを感じた一瞬であった。



舟運によって活況をみた「江戸優り・佐原」の伝統的佇まい

2. 地域の記憶が奪われた時

東京近郊の駅前、とくに私鉄沿線の駅前は、一体どこの駅なのかが分からない位に同じような佇まい

になっている。私鉄沿線では駅の作り方まで同じである。これは効率性を重んじ標準化を進めた先の結果であり、駅前の風景はJIS規格のまちづくりの代表的な事象であろう。そこに本来あったはずの「地域の記憶」は、標準化の考え方を進めるが故に、背後に追いやられたものと感じざるを得ない。しかし一方では、標準化を進めた結果として高度経済成長を現実のものとしたこともまた事実であった。

加えて、最近の市町村合併では、地域の記憶の代表であった地名さえも奪い取って新市名を創設している例が少なくない。標準化された風景によって「ここは何処」を生み、ついに「私は誰」といった事態に至っている。悉く地域から記憶を奪い取られることは、地域の尊厳にもつながる由々しきことと捉えたい。

我が国の人口はピークを迎えて緩やかに減少傾向にある。このような時代には、住まいや生産のための器を新たに作る必要もないし、大きな経済成長を求める必要もない。むしろ、人口が増え続けてきた時代に造りあげた器や仕組みを、時代の変化に伴う価値観の変化に合わせて、整理・統合して更新していけばよいのである。このような時代であるからこそ、今一度「地域の記憶」を見つめ直したい。「地域の記憶を呼び起こすこと」が、これからの時代に求められる最も大きなテーマではないだろうか。

3. 景観と観光は表裏一体、そこに共通するものとは

「地域の記憶」が風景として現れたものが「景観」であり、物語として語り継がれる地域が「観光」の対象となるものと見ている。昨今、『美しい国づくり政策大綱（平成15年7月）』が制定され、『景観法（平成16年6月公布）』が施行される等、「景観」がクローズアップされている。一方で『観光立国』が提唱され「観光」は地域経済をリードする新たな地域振興方策として、同様に焦点が当たっている。

景観が整えられた地域は多くの人々が観光として訪れたい地域になるであろうし、観光によって多くの人の目が入ることによって地域としても美しい景観を維持継承し、創りあげなければという行動につながるものとなる。いわば景観と観光とは、表裏一

体のものであることは自ずと理解できるものである。

では、この「景観」と「観光」とに共通するものは何なのであろうか。漢字尻取りではないが、両者に共通するものは『観』の一文字。広辞苑によると『観』とは「(仏教用語で) 真理を観察すること」とある。私自身は浅学の身であり、未だ真理に近づこうと研鑽している者であるが、記憶を失いかけている多くの地域を訪ね、そして佐原での体験を重ね合わせると、景観と観光を結びつけるテーマは「地域の記憶を呼び起こすこと」にあるのではないかと考えているところである。地域の記憶を辿り、それを風景と物語として再生することが、景観と観光の両者をつなぐ基本的な要件であると考えたい。

4. 地域の記憶を呼び起こすために

「地域の記憶」を辿る時に、先人が書き記した文献は最大の手がかりであることに疑いの余地はない。しかし活字からのメッセージには限界がある。活字から得られた知識を背景として、むしろ現在目の当たりに広がる佇まい・風景から人々の暮らしの中で大切に育まれて継承されてきた地域の履歴や地域に対して慮る気持ちを感じ、人との対話の中から地域の中での固有の物語を知る。そしてその佇まい・風景と物語とを、「地域の記憶」の視点から紡ぐのである。

それぞれの家では、先祖から受け継いできたものを子供そして孫の世代にどのように残すかを当たり前のように考えて行っていることと思う。これこそが、その家の固有の記憶を先祖から今につなげ、そして後世に伝える取組みである。代々語り継がれてきた逸話も少なくないであろう。このような個々の家での取り組みの、地域への展開を図ることが、ここでいう「地域の記憶」につながるのである。同じことを地域版として拡大発展的に実施することによって、「地域の記憶が息づくまち」へと地域を導くのである。

その具体的な例を、再び佐原にみてみよう。佐原というまちから頂いた最大の宝物は、自分たちの住まう地域に誇りと愛着をもち、愚痴や嘆きでさえ伝統という名の自慢じゃないの？と思ってしまう程

の、熱い語り口調の方々と顔見知りになれたことである。「あれ、先生来てたの？ 今日は何？」と気軽に声を掛けていただき、毎回のように文庫・活字の世界には見出し得なかった言い伝えや謂れを惜しげもなく教えていただけることが、今では何よりの愉しみとなっている。当然、個々の商家に受け継がれてきた家訓は大切に継承されつづけている。その個々の伝統を重んじる心が地域全体へと発展しているのであり、その代表的なものの一つが「江戸優り・佐原」という精神である。江戸に優る文化を自分たちのまちは持っているという、大きな誇りを皆で共有している。

一度佐原を訪れると、帰りはほとんど22時08分佐原発の千葉行きの電車。首都圏では珍しくなっているボックス席に悠々と座り、闇の中に浮かぶ家のほのぼのとした明かりを眺めながら、電車のリズムに合わせて今日一日に出会った方々との会話を思い出す瞬間が、私の至福の時間である。

地域の記憶は、決して目に見えるもの、文字として残されたものだけではない。気風・気質、誇り・愛着そして自慢、場合によっては愚痴・嘆きの反対にあるもの等の中にも見え隠れしているものである。その一つ一つを丹念に感じ取って、「地域の記憶」という一枚の美しい絵柄を紡ぐ能力こそが、とても必要となっていることに気付いたのである。



佐原の商家・伊能家の家訓。
石碑に刻まれて旧宅に置かれている。

◇おわりに～地域の行く末は “成熟への途”か“衰退への途”か

本稿をご覧頂いている読者の方々に問いたい。皆様方がお住まいの地域では、地域の記憶を大切にされていますか？ 地域の個性が巧くまちづくりに活かされていますか？

まちづくりを取り巻く価値感は大きく変わってきているのである。人口減少期を迎えた今、もはや大きな成長を求める必要はない。そのような時代に地域が着実に成熟の途を歩むためには、「地域の記憶」をまちづくりの精神背景におく取組みが必要不可欠なのである。品格のないまちづくりでは、支持者・共感者が離れていって、いずれはまちづくり活動が破綻を迎えるであろう。奇をてらった取組みは、瞬発力は活かされても持久力は伴わないであろう。長きに亘って支えられる王道のまちづくりとは、やはり「地域の記憶」を背景におく取組みしかない。

「ここは何処、私は誰？」という嘆きのメッセージが投げかけられることのない地域づくりをめざした取り組みを進めるか否かの判断を誤ると、着実に成熟の途を歩むのではなく、徐々に衰退の道を歩むことになるかも知れないのである。その岐路にある今、私たちができることは…。身近なところから「地域の記憶」を呼び起こすことを、直ぐにでも始めたい。



各家の記憶が展示物・佐原おかみさん会が主催している「佐原まちぐるみ博物館」